

論文

自己高揚呈示と自己卑下呈示が受け手に与える印象 —シナリオ法による検討—

岡田 文平 五味 侑華 山崎 瑞紀

本研究では自己高揚呈示、謙遜呈示、自己卑下呈示の3つの自己呈示が受け手に与える印象について、スピーチ場面とマラソン場面という2つの場面を設定し、「有能さ」と「温かさ」の2指標を用いて印象を検討した。全体として、謙遜呈示は「有能さ」「温かさ」ともに最も高い評価を得ていた。自己高揚呈示も謙遜呈示と同様に「有能さ」の評価は高いが、「温かさ」の評価は最も低かった。自己卑下呈示は「有能さ」で最も評価が低いものの、「温かさ」ではスピーチ場面とマラソン場面で評価が異なっており、温かい人柄であるという評価を学業領域では得られるが、運動領域では得られないことが示唆された。全体として、自己を否定的に呈示する自己卑下呈示のポジティブな効果は限定的であり、控え目な謙遜呈示の方が「有能さ」「温かさ」ともに好ましい印象をもたらすことが示された。相互協調的自己観の優勢な者の方が謙遜や自己卑下呈示を「温かさ」において高く評価していた。

キーワード：自己呈示、謙遜、多元的無知、文化的自己観

1 はじめに

自分の能力や特性を控え目に呈示したり、成功を運や他者からの助力などの外的要因に帰属したりするなど謙遜的にふるまう人は、自分の能力や特性を誇張したり、成功を能力や努力などの内的要因に帰属したりするなど自己高揚的にふるまう人よりも、特に対人面で好意的に評価される傾向がこれまでに見出されている (Bond, Leung, & Wan, 1982; Sedikides et al., 2007 など)。

なかでも日本文化においては、自己高揚的行動よりも自己卑下の行動や呈示が多く見られることが報告されているほか (Heine & Hamamura, 2007; 村本・山口, 1997 など)、関係性維持に動機づけられた自己卑下呈示の多いことが見出されている (吉田・浦・黒川, 2004)。

日本の研究において「自己卑下呈示」と言うときには、自分の能力や特性を控え目に呈示する「謙遜」と、自分の否定的側面について敢えて言及して、相手よりも低い存在のように伝えろといった狭義の「自己卑下呈示」が混在して用いられているように思われる。本研究では、シナリオ法を用いて、狭義の自己卑下呈示と謙遜による自己呈示を区別し、自己高揚呈示、謙遜呈示、自己卑下

呈示を行った者に対して受け手が抱く印象について検討する。

ここで、日本人は謙遜呈示を最も高く評価するだろうと予想した (仮説1)。また、他者との調和を重視する相互協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) の優勢な者の方が、謙遜呈示や自己卑下呈示に対して好ましい印象を抱くと予想した (仮説2)。

さらに謙遜呈示や自己卑下呈示における多元的無知についても検討する。多元的無知とは、「集団の多くの成員が、自らは集団規範を受け入れていないにもかかわらず、他の成員のほとんどがその規範を受け入れていると信じている状況」(神, 2009, p. 300) とされる。日本人が自己卑下呈示や謙遜を行う理由は、自己卑下呈示や謙遜を行っている人に対して、自分自身が感じているよりも自分以外の他者は好ましいと思っていると認識しているためだと予想した (仮説3)。

2 方法

実験計画

3 (呈示スタイル: 自己高揚, 謙遜, 自己卑下) × 2 (場面: スピーチ, マラソン) × 2 (協調的自己観: 高群, 低群)。呈示スタイルは参加者内要因、場面と協調的自己観は参加者間要因。

実験参加者

東京都市大学の大学生 91 名。欠損値のある者を除いた 86 名 (男性 56 名, 女性 29 名, その他 1 名) を分析対象とした。平均年齢は 19.4 歳 (SD=1.3) だった。

OKADA Bunpei

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2019 年度4年生
GOMI Yuka

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2019 年度4年生
YAMAZAKI Mizuki

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科准教授

スピーチ条件 41 名，マラソン条件 45 名。

質問紙の構成

(1) シナリオ

英語のスピーチ大会で代表メンバーに選ばれたという学業に関する成功場面（以下，スピーチとする）とマラソン大会で上位に入賞したという運動に関する成功場面（以下，マラソンとする）の 2 種類のシナリオを作成して用いた。どちらの場面もクラスメートからの賞賛に対し，大学生の主人公が自己高揚呈示，謙遜呈示，自己卑下呈示の 3 つのうちいずれかを行うシナリオが順に記述されていた（付録参照）。

(2) 自己呈示者に対する印象評定

Fiske, Cuddy, & Glick (2007) を参考に，「温かさ」2 項目（「親しみやすい」「温かい」），「有能さ」2 項目（「能力の高い」「勤勉な」）の計 4 項目を用いて，「まったくあてはまらない (1)」～「とてもあてはまる (7)」の 7 件法で尋ねた。それぞれ 2 項目の平均を得点として用いた。その際，「あなたは呈示者についてどのような印象を持ったか」「世間一般の人は，呈示者にどのような印象を持つと思うか」についてそれぞれ同じ 4 項目を用いて尋ねた。「温かさ」2 項目の相関は .66～.85，「有能さ」2 項目の相関は .43～.75 だった。

(3) 操作チェック

樋口・川村・原・塚脇・深田 (2007) を参考に，「呈示者の言動について，あなたはどのように思うか」という質問に対して，「自分を高く見せようとしている (1)」～「自分を低く見せようとしている (7)」の 7 件法で尋ねた。

(4) 文化的自己観尺度

高田 (2000) による文化的自己観尺度の短縮版 10 項目（相互独立性 4 項目，相互協調性 6 項目）を用いて，「あてはまらない (1)」～「あてはまる (5)」の 5 件法で

尋ねた。分析には相互協調的自己観項目の合計得点（協調的自己観得点とする）を用いた。α 信頼性係数は .64 だった。

その他，属性項目への回答を求めた。

手続き

授業内の一部の時間を利用して回答を依頼し，無記名式で回収した。その際，回答は強制ではなくいつでも中断できること，回答しないことで不利益を受けることはないこと等を伝えた。翌週にデブリーフィングを行った。

3 結果

3. 1 操作チェックについて

呈示スタイルが適切に機能しているかを検討するため，操作チェック項目について，3（自己呈示：自己高揚，謙遜，自己卑下）× 2（シナリオ：スピーチ，マラソン）の二元配置分散分析を行った。結果として，自己呈示の主効果のみ有意だった ($F(1.84, 154.28) = 144.31, p < .001$)。多重比較の結果，自己高揚 > 謙遜 > 自己卑下の順に自分を高く見せようとしていると評価されており，自己呈示の操作は成功していた（スピーチでの平均：自己高揚 1.98，謙遜 5.02，自己卑下 5.63，マラソンでの平均：自己高揚 2.49，謙遜 5.04，自己卑下 5.71）。

3. 2 自己呈示者に対する印象について

評定者自身の印象について，3（自己呈示：自己高揚，謙遜，自己卑下）× 2（場面：スピーチ，マラソン）× 2（協調的自己観得点：高群，低群）の三元配置分散分析を行った。協調的自己観得点の中央値である 22 点未満の者を低群 ($N=36$)，22 点以上の者を高群 ($N=50$) とした。自己呈示条件ごとの場面別平均を図 1（有能さ），及び図 2（温かさ）に示す。

結果として，「有能さ」では，自己呈示の主効果 ($F(1.82, 148.83) = 35.22, p < .001$)，自己呈示と場面の交互作用 ($F(1.82, 148.83) = 3.52, p = .04$) が有意だった。

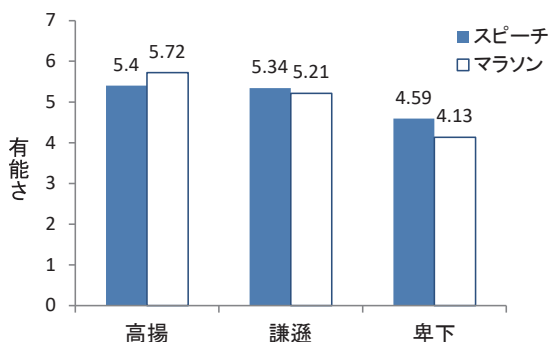


図 1 各自己呈示の場面別評定平均（有能さ）

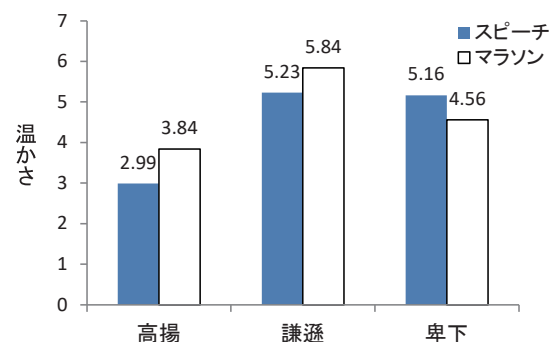


図 2 各自己呈示の場面別評定平均（温かさ）

また協調的自己観の主効果 ($F(1, 82) = 6.38, p = .01$) も有意であり、高群の方が低群よりも呈示者を高く評価していた。自己呈示と場面の交互作用が有意だったため、単純主効果の検定を行った。場面ごとに見たところ、スピーチでは自己高揚と謙遜の評価が自己卑下よりも有意に高く、マラソンでは自己高揚 > 謙遜 > 自己卑下となっていた (いずれも $p < .01$)。また、自己呈示ごとに見たところ、マラソン場面の方がスピーチ場面よりも自己高揚呈示のときにより有能と見られ、自己卑下呈示のときにより有能でないと見られていた (いずれも $p < .01$)。

「温かさ」では、自己呈示の主効果 ($F(1.82, 148.91) = 72.57, p < .001$)、自己呈示と場面の交互作用 ($F(1.82, 148.91) = 10.91, p < .001$)、自己呈示と協調的自己観の交互作用 ($F(1.82, 148.91) = 4.51, p = .02$) が有意だった。自己呈示と場面の交互作用が有意だったため、単純主効果の検定を行った。場面ごとに見たところ、スピーチでは謙遜、自己卑下の評価が自己高揚よりも有意に高く ($p < .01$)、マラソンでは自己高揚 < 自己卑下 < 謙遜となっていた ($p < .01$)。また、自己呈示ごとに見たところ、自己高揚条件、謙遜条件ではマラソン場面の方がスピーチ場面より呈示者が高く評価されていたが (高揚、謙遜とも $p < .01$)、自己卑下条件ではスピーチ場面の方がマラソン場面よりも高く評価されていた ($p < .01$)。次に、自己呈示と協調的自己観の交互作用が有意だったため、単純主効果の検定を行った。協調的自己観の高群、低群別に見たところ、両群とも自己高揚 < 自己卑下 < 謙遜となっていた (いずれも $p < .01$)。また、自己呈示ごとに見たところ、高群の方が低群よりも自己高揚条件での得点平均が低く (高群 3.25, 低群 3.69, $p < .01$)、謙遜条件 (高群 5.65, 低群 5.42, $p < .1$)、自己卑下条件 (高群 5.03, 低群 4.58, $p < .01$) での得点平均が高かった。

3. 3 多元的無知について

多元的無知の現象がみられるかを検討するため、「あなたは呈示者についてどのような印象を持ったか (自己)」「世間一般の人は、呈示者にどのような印象を持つと思うか (他者)」の平均比較を行った。謙遜呈示と自己卑下呈示別に、「有能さ」「温かさ」それぞれについて、2 (場面: スピーチ, マラソン) $\times$ 2 (自己, 他者) の二元配置分散分析を行ったところ、謙遜呈示の場合、「有能さ」では有意な効果はみられなかったが (自己 $M=5.27$, 他者 $M=5.23$)、「温かさ」では「自己・他者」の主効果のみ有意であり、世間一般の人の方が自分よりも高く評価するだろうと認知していた (自己 $M = 5.55$, 他者 $M = 5.77$; $F(1, 84) = 4.27, p = .04$)。自己卑下呈示の場合は「有能さ」「温かさ」とも有意な効果はみられなかった。

4 考察

4. 1 自己呈示による印象、及び協調的自己観との関連

全体として、謙遜呈示は「有能さ」「温かさ」とともに最も高い評価を得ており、仮説 1 が支持された。自己高揚呈示も謙遜呈示と同様に「有能さ」で高い評価を得るが、「温かさ」では最も低くなっていた。自己卑下呈示は一貫して「有能さ」において最も評価が低かった。一方、「温かさ」では場面によって評価が異なり、スピーチ場面では謙遜と同様に高い評価だったが、マラソン場面では謙遜より低い評価となっていた。自己卑下は学業領域では温かいという印象をもたらす効果があるが、運動領域では効果のない可能性がある。

また、「有能さ」においてマラソン場面の方がスピーチ場面よりも自己高揚呈示のときにより有能、自己卑下呈示のときにより有能でないと見られており、呈示者の言及内容がそのまま受け取られていたのに対し、スピーチ場面では謙遜呈示と自己高揚呈示との間に差はみられず、謙遜による効果が見られた。謙遜できること自体が能力の証と考えられるのかもしれない。スピーチなどの学業場面の方が運動場面よりも謙遜規範が強く働く可能性がある。

協調的自己観については、協調的自己観が優勢な者の方が全体として「有能さ」を高く評価する傾向がみられた。「温かさ」では、協調的自己観の優勢な者の方が自己高揚呈示を低く評価し、謙遜や自己卑下呈示を高く評価していたことから、仮説 2 が支持された。

4. 2 多元的無知について

謙遜と自己卑下呈示については、自らは規範を受け入れていないが、多くの他者が受け入れていると信じているために維持されているのではないかと考え、自己と他者の評価平均の比較を行った。結果として、謙遜呈示の「温かさ」のみで、世間一般の人の方が自分よりも高く評価するだろうと認知されていた。ただし、自己評価の平均も 5.55 と中立点 4 よりも高いため、「自らは規範を受け入れていない」とは言えず、その点では、「集団の多くの成員が、自らは集団規範を受け入れていないにもかかわらず、他の成員のほとんどがその規範を受け入れていると信じている状況」(神, 2009) とする多元的無知には厳密には当てはまらないと言え、仮説 3 は支持されなかった。ただし、自分よりも他者の方がより社会的規範を受け入れているだろうと多くの者が推測し、他者に合わせる形で規範をより受け入れていくということが謙遜や自己卑下呈示にあるかもしれない。

4. 3 今後の課題

本研究では、自己卑下呈示として、自己を否定的に呈

示する自己卑下呈示と、自己否定まではしないが控え目に呈示する謙遜呈示とに分けて、受け手が抱く印象に違いがあるのかを検討した。結果として、謙遜呈示は「有能さ」「温かさ」ともに高く評価されるものの、自己批判的であればよい印象につながるというわけではなく、自己卑下呈示のポジティブな効果は限定的であることが明らかになった。具体的には、自己卑下呈示は「有能さ」において最も評価が低いが、「温かさ」ではスピーチ場面とマラソン場面で評価が異なっており、温かい人柄であるという評価においては学業領域では効果があるが、運動領域では効果の減じることが本研究により示唆された。

本研究では、自己高揚呈示、謙遜呈示、自己卑下呈示の3つの自己呈示について、スピーチ場面とマラソン場面という2つの場面のみを取り上げて、自己呈示による印象評価の違いを検討したが、今後は、学業領域や運動領域としてスピーチやマラソン以外の場面でも同様の結果がみられるかを検討していく必要があるだろう。

参考文献

- [1] Bond, M. H., Leung, K., & Wan, K. C. (1982) The social impact of self-effacing attributions: The Chinese case. *The Journal of Social Psychology*, 118, 157-166.
- [2] Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (2007) Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in Cognitive Sciences*, 11, 77-83.
- [3] 神信人 (2009) 集合的無知 日本社会心理学会 (編) 社会心理学辞典 丸善出版, pp.300-301.
- [4] Heine, S. J., & Hamamura, T. (2007) In search of East Asian self enhancement. *Personality and Social Psychology Review*, 11, 4-27.
- [5] 樋口匡貴・川村千賀子・原郁水・塚脇涼太・深田博己 (2007) 対人印象に及ぼす自己卑下呈示の効果の規定因 広島大学心理学研究, 7, 103-108.
- [6] Markus, H.R. & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- [7] 村本由紀子・山口勸 (1997) もうひとつの self-serving bias —日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕的傾向の共存とその意味について— 実験社会心理学研究, 37, 65-75.
- [8] Sedikides, C., Gregg, A. P., & Hart, C. M. (2007) The importance of being modest. In C. Sedikides & S. J. Spencer (Eds.), *Frontiers of social psychology. The self*. New York, NY, US: Psychology Press. pp.163-184.
- [9] 高田利武 (2000) 相互独立的一相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, 8, 145-163.
- [10] 吉田綾乃・浦光博・黒川正流 (2004) 日本人の自己卑下呈示に関する研究：他者反応に注目して 社会心理学研究, 20, 144-151.

付録：提示したシナリオ (棒線部は条件により入れ替え)

1) スピーチ場面

大学生のA君は、英語のスピーチ大会に出場する代表メンバー10人の内の1人に選ばれました。これを聞いたクラスメートが、「スピーチ大会の代表に選ばれるなんて、すごいね」とクラスの皆の前でA君に言いました。するとA君は、「僕は英語が得意だからね、10人の中でも上位だと思うよ (自己高揚条件)」と言いました。

謙遜条件：

「たまたまだよ、選ばれたのは運がよかっただけだよ」

自己卑下条件：

「ぜんぜんだよ、何度も言い間違えたし、10人中10番だと思うよ」

2) マラソン場面

大学生のA君は、市のマラソン大会に参加したところ、上位に入賞しました。これを聞いたクラスメートが、「市のマラソン大会で入賞するなんて、すごいね」とクラスの皆の前でA君に言いました。するとA君は、「ああ、僕は長距離がけっこう得意なんだ、努力もしているしね (自己高揚条件)」と言いました。

謙遜条件：

「いやいや、今回は運がよかったんだ、みんなも応援してくれたしね」

自己卑下条件：

「いやいや、今回はまぐれだよ、いつもは遅いし、全然だめなんだよ」